
哀しきDreamer

大島なるみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀しきDreamer

【Nコード】

N7168B

【作者名】

大島なるみ

【あらすじ】

想うだけでいい、見返りはいらない…。あの娘は幸せそうな表情で言っていたけど、私は…。悲恋小説です。苦手な方はBACKして下さい。

「想うだけでいいの。見返りがなくても平気だよ」
あたしが良く知るあの娘は、良くそう言っていた。 想うだけの恋。

あの娘は幸せそうだった。
だからあたしも、そう思えるようになりたかった……のに。

「ダメだよ、松永さん」
あたしの言葉の後で、彼があたしにくれたのは、その一言だけだった。

冷たい空気で、夜空がいつもより綺麗に見えるのが恨めしい。
あたしが欲しいのは、そんな言葉じゃないよ！

そう言いたいのに、あまりの寒さにかじかんだのか、あたしの唇は言葉を発せなくなっていた。

現に彼は、もうあたしの傍には居ない。

“寒いから送る”と言ってくれたのに、あたしはそれを拒んだのだ。

ここから最寄りの駅までは、徒歩でもそれ程遠くない距離だから。
でもあたしは、彼を見送って随分経った今も、この場から一步も動けずにいた。

彼が最後にあたしに向けた言葉が、あたしの心にこびりついている。

「松永さんの気持ちは嬉しいよ。だけど、俺には決まった相手も居るし……」

「それでもいいです。分かった上で言ってるんです。本気になれな
いって言うなら、気紛れでかまいません。あたしは……」

「松永さん」

あたしはこの時、自分がどれだけ道理に反することを口にしていくか分かっていた。でも“言わなくては”と“今しか伝えられない”ってことも分かっていたから、あたしは言わずにいられなかった。だけど彼はそれさえも遮った。あたしに言わせない為か、はたまた自分がその先を聞きたくなかったのか、どちらかは分からないけれど。

「ダメだよ、松永さん」

彼はもう一度、あたしにそう言った。

「君の言っていることは…ダメだよ」

「……」

「最初はそれでいいかもしれないけれど、……やっぱりそんなの虚しすぎる。ただ虚しいだけだよ」

彼はそう言って、すごく哀しそうな表情をしていた。

「……虚しい、か」

あたしはそう口にして、深く息を吐き出す。それと共に、奥に潜んでいたものがふいに身体の中を押し上がってきた。

それをせき止めるようにグツと顔を上げてみる。

空には満天の星、それを一層引き立てる透き通る冷たい空気。

だけどあたしの目元から溢れだした熱い水は、その動作を諸ともせず重力に逆らうこともなく、あたしの頬を濡らし滑り落ちていった。

「君の言っていることは…ダメだよ。そんなの虚しすぎる。ただ虚しいだけだよ」

彼が最後にくれた言葉と、哀しそうなあの表情が脳裏から離れない。

「…分かってる」

そう口にした声が涙で擦れる。それでもあたしは自分に言い聞か

せるように続きを呟いた。

「…分かってるもん。そんなの、あたしの方が一番…」

だけど口にした言葉だって、あたしの本音には違いはない。
どうしようもないことだったのは知ってる。

だから別に、本気じゃなくてもいいし、気紛れでもいい。

あるいは嘘だっていいから、一度……この瞬間だけ

「好き」の一言を、彼の口から聞きたかったんだ。

どうせ離れていくんなら、ずっと願ってた夢を一度見させて欲しかった。

彼の性格上、そんなことできないのは分かっていたけれど。

それでも、

「そんなの虚しいよ」なんて言わないで……。

「想うだけでいいの。見返りがなくても平気だよ」

あたしが良く知るあの娘は、良くそう言っていた。 想うだけの

恋。

今のあたしには、到底成し得なかったこと。

それなのに、どうして今あの娘の言葉を思い出したりするんだろう。
う。

今のあたしを見たら、あの娘はなんて言うのかな。

そう思うと、あたしは今の自分がすごく滑稽に思えて、哀しくて
情けなくて少しだけ笑った。

あたしは想うだけの恋はできなかった。

でも、後悔はしていない。

結果として私は自分だけでなく、彼さえも苦しめてしまったかもしれない。

でも、この想いを夢のままに終わらせることは、したくなかったから。

「……こういう恋の終わり方を選んでも、悪くないでしょ？」

夜空を見上げてそう呟いて、無理にそっと笑みを浮かべてみる。

そしてようやく、その寒さにかじかんだ重い足で、最寄り駅に向かい歩きだした。

ふと、はるか後ろの方で、まばゆい2つの小さな光が見えたけれど、あたしはもう振り返らなかった。

End .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7168b/>

哀しきDreamer

2011年1月20日02時43分発行